



6 学びの主体性を高める「国語びらき」

「言語活動の充実」を意識するあまりに活動そのものを目的化した授業、時間数が足りないといった理由から、文章を読んだだけで終わりにする単元、教材研究が甘く、指導に自信がもてなかった教材書かせたものの、評価が遅れて返却できない作文、国語が苦手、国語が嫌いという子どもたちの意識調査の結果……。さまざまな反省をばねに、新しい学年を迎えるこの時期に、改めて、「国語びらき」のための教材研究について考えてみたいと思います。

今回は、特に、小学校教育の出口に向かう高学年がスタートする五年を対象に、具体的な取り組みを考えてみます。

わくわく感・どきどき感 ——名前を丁寧に書く

新学期、子どもたちの胸は、期待にあふれています。とりわけ高学年になると

いうのは、幼いなりに背筋を伸ばす前向きの緊張感、成長感もてる重要なタイミングです。この「子どもの心の弾み」をつかむことが大切です。

始業式の日、子どもたちは、新しい教科書と初めて対面することになります。ここでまず「今までと違う」という感動を引き起こしてもらいたいと思います。光村図書 of 教科書は高学年から上下合本となり、一冊の厚みがぐっと増しています。「中学校へ一歩近づいたね。これから一年間、ともに勉強する大事な教科書に、しっかりと丁寧に名前を書こう」——教師のひと言は、想像以上に大きな影響をもちます。しかも、新しい一歩を踏み出す進級の日の言葉は、いつもとは違った輝きをもつはずです。

五年のみならず、どの学年でも、教科書との出会いを大切にしたいと思えます。始業式の日、忙しい一日ではあるでしょう。しかし、「教科書との出会

わせ方が、一年間の国語の授業を左右する」という気持ちで、せめて丁寧に名前を書かせたいものです。

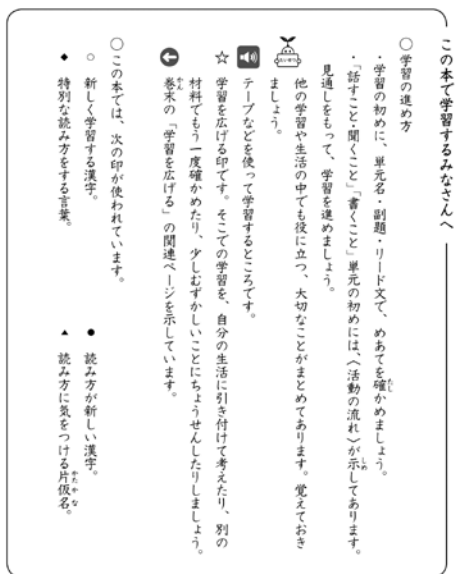
初めての国語の授業では 学びの主体者としての構えを

先日、大学の授業の中で、学生から興味深い話を聞きました。小学生の頃、担任の先生が「教科書をもらったら、まず表紙を開いてぐっと押す。次に中ほどのページを開いて同様に押す。最後に裏表紙を開いてぐっと押す。こうすると机に置いたときに安定する」と教えてくださったというのです。以来、その学生は、教科書に限らず、新しい本を必ずそうして開いているのだそうです。小学校時代の担任の影響力は多大了。ことほどさように、教科書の使い方をしっかりと身につけたクラスと、そうでないクラスとは、同じ教科書を使っているにもかかわらず、受け取

るものが大きく違ってくるはずですが、新学期の「国語びらき」は、ぜひ、教科書の使い方について再確認して、スタートしましょう。

ここからは、五年の教科書を傍らに置いて読み進めてみてください。

いよいよ表紙を開きます。表紙の裏には「この本で学習するみなさんへ」(※1)という囲みがあります。もう気づかれませんでしたね。教科書は、学びの主体者である子ども自身に向けて作られているのです。



※1：「この本で学習するみなさんへ」

「この本を使い、国語の力を身につけてください」というメッセージが、いたるところに表れています。

「学習の進め方」は、子どもの自力解決に向けた手がかりとなります。「学びの主体は君たち自身。君たちが賢くなるための手助けがたくさん用意してあるよ」という思いを子どもに実感させることが大切です。教科書という、最も身近な存在を通して、子どもたちの「学びの主体性」を育てたいものです。

目次へ進みます。「どんな勉強・活動をするのかな」「どんな物語と出会うのかな」など、子どもの気持ちを高めたいところです。既習事項である「目次の見方」を、こうした実の場で活用し、習熟させることが大切です。

特に、高学年では「学習を広げる」という資料にも着目させます。もちろん、教師も内容を目を通しておくことが必要です。例えば、「この本、読もう——本は友達」という図書リストがあります。五年では、三十五冊の本が表紙付きで紹介されています。学校図書館や地域図書

館などとの連携によって、朝読書や授業での並行読書を進める学校も増えていきます。これは、子どもたちが、自らの読書生活を計画するときの絶好の資料となることが期待できます。

続いて、「学習の見通しをもとう」のページです。高学年には、見通しをもち目的のある学習計画を立てる力が求められます。それを支えるものとして、このページがあります。国語科の三領域一事項に整理された、この学年で身につけた国語の力が示されているのです。学習前に見通しをもつ、学習の途中で目的を確認する、学習後に振り返って自己評価に使うなど、さまざまに活用してほしいものです。それには、指導する側の見通しと、活用の意識が不可欠といえます。

「リスタート」の単元 「5年生の国語学習を始めよう」

五年の教科書には、編集上の顕著な特徴があります。それが、第一単元の前に設けられた「5年生の国語学習を始めよう

う」です。いわゆる「リスタート」のための単元。子どもたちに学習の主体者としての意識をもたせ、四年生までに蓄積した「言葉の力」を再確認して、高学年としての新しい学びをスタートさせたいという願いから位置づけられたプレ単元です。

まずは、P15の「音読をするとき」(※2)を全員で確認し、「丘の上の学校で」(那須貞太郎)を音読します。窓の外に広がる雄大な景色を、教室の中から見る視点の動き、この季節ならではの自然の生命の息吹、それらを感じたままに声に表す学習活動です。細かい解説は不要でしょう。分からない言葉は、辞書を使って調べます。班で分担してもよいかもしれません。家庭学習として予習する習慣がついていればなおよいでしょう。

「いいなあ」と思ったところにサイドラインを引き、理由を書き込みます。どんな景色か、絵を描いてもよいでしょう。「いいなあ」と思ったところが伝わるように、一人一人、何度も音読します。二人一組で聞き合い、感想を交流します。

グループで群読するのも楽しいでしょう。目的は、四年までの学習を思い出し、自分の音読を振り返ることです。

次の時間は「あめ玉」(新美南吉)を楽しみます。

「ごんぎつね」と同じ作者による作品だと気づく子どもも多いかもしれません。P15「物語を読むとき」を確認し、範読を聴かせます。ゆっくり読んで三分の長さです。いつも確かめること(いつの話か・どこの話か・誰が出てくるか)を簡単にメモさせます。続いて、「次のことに気をつける」の項目に従って、個人読みに入ります。教師は机間を回りながら個人指導します。その後、脚注にある「▼」の問いを手がかりに班で交流し、自分の読みを確かめたり、音読したりします。

週五時間という時間数を充実させるには

単に物語のおもしろさを発見することができます。その発見の実感を大事にしたいと思います。子どものさまざまな気づきを整理し、価値づけることができれば、読みも深まっていきます。

四年までに学習した、

- ・ 物語には、設定・事件・山場・結末などといった構成があること。
- ・ 登場人物の設定を読み取るためには、性格や状況を示す言葉を見つけること。
- ・ 人物の心情は、その行動や会話から想像できること。

などを確認することがこの時間のねらいです。「あめ玉」という楽しい教材を使って、これまでの学習を振り返り、自信と今後の学習への意欲をもたせたいものです。

千差万別である子どもたち一人一人の学習状況を把握し、後の授業の進度や展開を考えるために、教師にとっても貴重な時間になるはずです。指導者側にとっては、学年初めの診断的評価と位置づけることができます。

「リスタート」単元「5年生の国語学習を始めよう」は、三時間扱いの想定です。ここには、新出漢字が五字、提出されています。漢字指導に一時間を使っているのは、内容の指導が薄くなってしまうがちです。ここで、P15の左下、「P265～272「この本で習う漢字」を、自習用のページとして、子どもたちに紹介してほしいのです。ここには、新出漢字の画数と筆順、使い方が載っています。このページを参考にして、自分で漢字学習を進める習慣をつけるよう指導します。

より詳しく、成り立ちなどを知りたければ、音訓引きか総画引きで、漢字辞典で調べるよう促します。自ら目的に応じて調べる姿勢が大切です。中学年で学んだ「辞書の引き方」も活用されなくては、身についた学力とはいえません。

また、P257には「カンジー博士の漢字学習のすすめ」(※3)があります。年間を見通した計画的な学習を進めるといっ



※2：5年P14・15

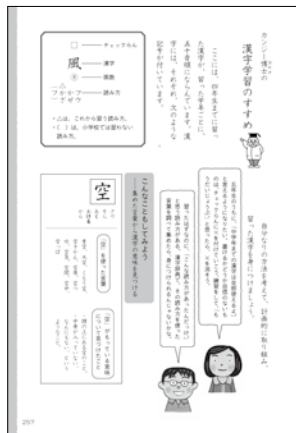
まさに、学習の主体者としての意識を、この時期にしっかり身につけさせることが、国語科にとって大切な指導となるのです。

● ● ●

学年の初めに、子どもたちがわくわくしながら教科書と出会い、主体的な学習者として見通しをもち、教科書をすみからすみまで使いこなす——そのために、教師は前もって教科書に目を通し、年間を見通した指導計画を考えておきたいものです。

新学期を迎える四月。

「国語びらき」を充実させて、わくわく感のある「私が主役」のリスタートを！



※3：「カンジー博士の漢字学習のすすめ」